時は過ぎゆく

田山花袋著

大正五年九月一日印刷
大正五年九月五日發行

定價金壹圓貳拾錢

著作者　田山花袋
東京市牛込區矢來町三番地中の丸

發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町中の丸

發行所　新潮社
電話(番町)二、二二三番
振替(東京)一、七四二番

時は過ぎゆく

印刷所　東京市神田區宮本町五番地
電話下谷五九〇八番
(印刷者)　新潮社印刷部
高橋治一

精選　名著複刻全集　近代文学館

時は過ぎゆく

田山花袋作

『何うも大變だ』あたりを見廻すと、良太はかう大息しない譯に行かなかつた。垣根は壞れてゐるし、畠は捨てたまゝになつてゐるし、草藪は容易には入つて行けないほどに深く〳〵繁つてゐた。奥の築山のあるあたりは、それでもいくらか秩序立つてはゐるけれども、何年にも手を入れたことのない松やら楓やら高野槇やらが繁りたい放題に繁つて、昔の大きな邸の址は、人工から再び自然に歸らうとする趣を見せてゐた。

『まア、仕方がない、ゆつくりやるだ』良太はかう思つて鋤を捨てゝ休んだ。あたりには誰もゐなかつた。林を透して來る夕日の影は赤くかれの顏を照した。

良太は田舍から頼まれて急に此處に來るやうになつた事情などを思ひ浮べた。今年の春、西風の寒く吹く日に、歷代の殿樣の住んでゐた田舍のお城が燒けた。丁度それは維新の大政がきまつて、藩侯が東京のお邸にお引移になつた壹々年であつた。火は大手に近いある邸から起つて、見る〳〵大名小路の士族屋敷を燒き拂つて、勢熾んに三の丸の新御殿へと移つて行つた。人々は何うすることも出來なかつた。自分の邸の防禦にすら手が足りないほどであつた。あれよ〳〵と言つて、人々は唯新御殿から本丸の方へと燒けて行くのを見た。黑煙は漲るやうに卷き上つて、猛火の中に天守閣の白く立つてゐるのが見えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

其時良太は大名小路の主家の難に赴いて、一方家人を指揮すると共に、一方家具を裏の廣場へと持ち出してゐた。箪笥、挑箱、槍、刀、刀架、勝手道具、その向ふには、疊を立て廻した中に、奥方や老隠居や女中やお子達の避難してゐるのが見えて、折々立つて此方へ出て來る奥方の姿が鮮かに島の中に浮び出してゐた。あたりは時の間に燒野原と變つて、寒い西風が凄じく災後の餘塵を吹き立てた。誰の顔にも悲慘な絶望と悲哀とが明らかに見えた。殿様に別れ、世祿に離れ、權力に離れて、更に逢つたこの不慮の火災には、愈々士族の人達をして恐ろしい封建の末路を思はせずには置かなかつた。『もう、殿様の世もこれでお了ひだ』かう思ひながら、猛火の中に燒け落ちる天守閣を人々は唯茫然として見詰めた。

その火は殆ど城と城下とを悉く燒き盡した。朝から始まつて、夜になつても其火は猶消えなかつた。一方屋敷の方へと出て行つた火は、徒士足輕の住んでゐる方までをも燒き拂つた。良太の家も、かれが主家の世話に忙殺されてゐる間に燒けた。かれの妻は、養父養母と、七歳になる男の兒と二歳になる女の兒とを危くないところに避難させて、そして家具を戸外に運び出した。良太が行つて見た時には、氣丈な妻は、箪笥を持ち出す時に怪我したといふ膝や額の血を拭ひもせずに、『それでも好い鹽梅に八分は出しました。鍋、釜まで出したから、まア好い方だ。安心して下さい』かう言つて、矢張疊を立て廻した中から昂奮した蒼い顔を出して笑つて見せた。

良太は生れながらの侍ではなかつた。かれは城を取卷いた沼の向ふの村で生れた。その妹は城下の町の

小商賈の妻になつてゐた。しかしかれは祖先傳來の百姓に滿足しては居られなかつた。かれは若い頃に、今の主家の仲間に住み込んで、それから足輕になつた。主家は代々藩の家老をつとめるやうな立派な家柄なので、江戸と田舍との間をかれは何遍往來したか知れなかつた。主家の緣戚になつてゐる矢張家老の家柄の、若い勤王家の伴をして京都から河內の方へと旅行した時には、歷代の荒廢した山陵をそれからそれへと檢分して歩いた。何の守樣家來といふ堂々とした書附を先から先へと廻して、宿場といふ宿場からは、本馬と輕尻とを仕立てさせた。

それは丁度維新の風雲の次第に色濃くなりつゝある時代であつた。浦賀の黑船、櫻田の變、橫濱の開港、つゞいて長州征伐が始まつた。その時、かれは藩の侍分の家に養子に入り込んで、もう一廉の侍になつてゐたが、同藩の人達と共に御領分の河內の陣屋詰を命ぜられて、いざと言へば、大阪から長州の方へと出張するばかりになつてゐた。何といふ騷々しい世の中であつたであらう。京都では暗殺が暗殺につゞき、江戸と京都との間には、早打が織るがごとくに往來した。

從つて藩中も動搖した。藩唯一の學者で、前に山陵檢分のために伴をした勤王家は、佐幕派の方から壓迫されて、一時は閉門を命ぜられて、それから間もなく水戸の方に行き、歸つて來てからは、城外のある村に閉居した。かれの妻と妻の姉とは、其時分、其處に行つて、その勤王家とその奧方との萬端の世話をした。

振返つて考へて見ても、實に目まぐろしい變遷であつた。何が何だかわからないやうなことが多かつた。鳥羽の戰爭から將軍家の歸東、彰義隊の亂、つゞいて薩長の官軍が潮のやうに關東に入り込んで來るまで、かれは或は江戸に、或は田舍にゐてそれを見たり聞いたりしてゐたが、何れが本當で何れが嘘だかわからない中に、城は官軍に明け渡すことになつて、總督の軍隊がやがて潮のやうに城の内に入り込んで來た。

筒袖にだんぶくろ、陣太鼓を叩いて調練するさまも異樣であつた。『宮さん、宮さん、お馬の前にひらひらするのは何ぢやえな……』さうした歌が城内の到る處へ滿ち渡つた。

かれの總領の男の兒は其時丁度四つ位であつたが、いつもその調練の太鼓の音に眼をさました。

會津、奥羽の役には、かれは磐城口から仙臺の方へと入つて行つた。しかし大した戰爭のなかつたその方面では、一年と經たない中に歸ることになつて、翌年の春には、かれは妻子の安全な顏を見ることが出來た。そしてそれから後には、廢藩置縣、斷髮令、禁刀令などが續いたのであつた。

『刀は侍の魂だ。刀をさゝせないとは餘りだ』

『刀を捨てゝ町人と同じになれとは情けないお布令だ』

かういふ聲が彼方でも此方でもきこえた。髮を斷つのは一層それよりも辛いらしかつた。そして一方では、かれ等はこれから先の身邊といふことをも考へなければならなかつた。殿樣の去つた後の城下は寂と

して丸で火が消えたやうであつた。

城の焼ける時分には、時勢の潮流に乗つた藩の人達は、皆な多くは新しい東京の方へと出て行つてゐた。主家の主人も、勤王家の學者も、皆なそれ〴〵要路に向つて出て行つた。ことに、良太の世話になつた勤王家は、早くから攘夷を唱へた人だけあつて、當路の人々に知己が多く、逸早くある官省に職を奉じて、今では立派な位置に身を置くやうになつてゐた。

良太はある時その人から相談を受けた。

『何うだ、やつて呉れないか』

『左様で御座いますな』

かう言つて良太は躊躇した。

と、勤王家は、『田舎に引込んでゐたつて仕方があるまい。ぐづ〴〵してゐれば、何うせ碌なことはない。終には、公債までも手をつけて了はなければならない。それよりもあそこの下邸は、古いお下邸で、君公もあれをもう少しよく整理して置きたいと仰しやる。それに、當分私に住んでは何うだと仰しやる。不便だから今は困るけれど、その中にとお受けをして置いた。誰か一人是非眞剣にやつて貰はなくつてはならないのだが、お前達夫婦がやつて呉れると好いがなア』

『猶よく考へまして……』

『これからは、士族はもう駄目だ。ちやんと土臺をきめてかゝらなければ立行かない。これまでは家祿と言ふものがあつて、言はゞまア、遊んでも食つて行かれたやうなものだが、これからはさうは行かない。皆な獨りで獨立して行かなければならない。引受けて呉れゝば、お前達夫婦の一生の世話は、私が見てやるが……。何うだな？』

『猶、考へて見まして……』

『お前も知つてゐる通り、あの邸は廣いが、急に整理する必要もない。段々に、お前が指揮してやつて呉れゝば好いのだ。さうすれば、おかねも來て呉れるやうになるし、萬事につけて都合が好いから、成るべくなら、さうして欲しい』

その時は確答もせずに引下がつたが、今までの關係上、無下に斷わるわけにも良太には行かなかつた。主家の緣戚ではあるし、妻の幼い頃からの主人ではあるし、それに自分の身の上から考へて見ても、將來何をしようといふ確りとした目算があるではなし、良太は數日の間、彼方に行き此方に行きして相談したが、とう〳〵それを引受けることになつた。妻の父は、『代々御世話になつてゐるお家だ。それは結構だ』かう言つて賛成した。

其時、良太に養父母がなかつたなら、かれは東京行を思ひ留つたかも知れなかつた。良太は侍になりたいばかりに、自分で望んで養子には入つたのだけれども、今になつて見れば、強ひてその家名を相續する

必要もなかつた。それに、その養父母と妻との折合も餘り睦しい方ではなかつた。養父母には後になつてから男の兒が產れた。

良太が田舍を立つて來る時、養母は言つた。『お前は、家のあとはつがない氣かえ？　それなら、そのやうにしなければならないから……』この言葉の陰には、公債の處分がかくれてゐた。養父母はそれなら當然公債は此方で貰はなければならないといふ腹であつた。しかし良太はそれには確答を與へないで出京した。

それから半年ほどして、妻のおかねは二人の兒を伴れてやつて來た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

良太は半ば破壊された下邸の一部を整理して住んだ。それは元の邸の残部で、流石昔は殿様が折々お出になつただけに、木口なども精選され、庭と客間の具合なども注意してつくられてあつたが、何しろ百年以上も経過した家なので、垂木も古く、庇もところ〴〵破れて、入つて見ると、壁は到る處荒ちてゐた。で、主人の入るまでは、其方は其方でそつとして置くことにして、かれは先づ勝手に近い、昔女中の住んだらしい六畳の二階と八畳の下階とを掃除した。

勝手の傍には、古い内井戸があつて、腐つた縄や古い桶がそれに吊されてあつた。かれは先づそれを新しくして、つゞいて流しの板を張り替へさせた。昔から十何年も番人として住でゐた佝僂の男は、もう七十近い年であつたが、その男は、フム〴〵などと納つたやうな口の利き方をして、臺所の向ふにある三畳の一間に猫か犬のやうな汚ない生活をしてゐた。そこにさし込む午後の日影は、何時も破れた蒲團と襤褸と黒い壁とそこにちゞこまつて日向ぼつこりをしてゐる佝僂の蒼い寒心したやうな顔とを照した。

『捨さん、もつと綺麗にしたら好からうにな』

かう見かねて良太が言ふと、

『なアに、これで澤山だ。お天道様が何よりも暖かい』

こんなことを言ふかと思ふと、フム〳〵などと言ひながら、何か買ひに通りの方へと出て行つた。甘藷などを買つて來て、ひとりでそれをむしや〳〵食つた。

何うかすると、その伺僂は、良太に、殿様がお出になつた時分のことを口をもが〳〵させながら途切れ途切れに話した。『世が變つた、世が變つた。……もう、昔のやうなことは見られねえ。……お殿様も奥方も若くつて美しかつた。……あのお殿様が狂氣にならつしやるとは……世が變つたんで、えらう御心配なすたと見えるな……。奥方は？　またそれでも生きていらつしやるか……。昔は何も彼も立派ぢやつた……』かう言つて眩しさうにまばたきをした。

良太がやつて來ても、別に邪魔にするでもなく、さうかと言つて力にするでもなく、唯それだけが自分の用事と言はぬばかりに臺所の内と入口の前のところとを毎日掃いた。そして水などを汲んで手傳つた。

良太は先づ家の周圍から整理してかゝらなければならなかつた。一番先に、垣を直して、それから路を直した。良太の岩乘な姿は、荒れた邸の址のところ〴〵に見えた。時には竹藪の中に見えたり、夕日の當つた垣根のところに見えたり、風の吹き荒ぶ林に添つた路のところに見えたりした。そのあたりにはいつも新しい繩だの竹だの鋤だのが散ばつてゐた。

邸の前の街道は、江戸の四街道の一つで、交通上最も往來の頻繁な道路であつたが、都會の外れの宿場からもうかれ是一里近くも隔つてゐるので、人家なども疎らに、畠や林や草藪がその間に縫ふやうにし

て雑つてゐた。其處等に住んでゐる百姓達は、何百年も祖先傳來つゞいて土着してゐるやうな人達ばかりで、都會の市場に持出す野菜だの甘藷だの陸稻だのを作つて、それでその日〳〵の生計を立てゝゐた。良太は來ると間もなく、その人達と懇意になつた。侍ではあるが、根が農家に生れたかれは、百姓達に對しても、決して自からを高くするやうな態度を示さなかつた。後には彼方此方に風呂を貰ひに行くほど親しくなつて、夜は遲くまで爐側で話した。

良太の妻のおかねがやつて來た時には、餘ほど周圍が片附いてゐたが、それでもまだおかねの眼を驚かした。『えらいところだ。私はこんなぢやないと思つた』かう言つて、おかねは奥の戸などを明けて見た。總領の男の兒は、今まで見たこともない侮僂の其處等を歩いてゐるのを見て、氣味をわるがつて、ちつと見てゐたが、やがて母親の方へ駆寄つて、指してそして泣いた。

其時、良太は三十八、おかねは三十二であつた。二人に取つては、さびしい生活ではあつたけれど、養父母の許に虐げられて暮してゐるよりは、何んなに好いか知れないと二人は思つた。おかねは故郷の父母や兄や嫂などにわかれて來た話をした。中年で盲した母親が『東京に行つては、また何時逢はれるか知れない。達者でゐなよ』と言つて見えぬ眼から涙を流した話や、川舟の出るところまで父親と兄とが送つて來て呉れたことなどを繰返して、おかねは眼に涙を浮べた。『兄さんもつとめに出るやうになつたけれど、とても田舍に引込んでゐては仕方がない。遥遥なり何なりに志願して、その中、東京に出るようにすると

言つてゐました。丸で木から落ちた猿も同じだから、何處の家だつて困つてゐない家はありやしない。僅かなお金では、百姓にだつて急になれはしませんものね。』かう言つて田舎の士族達の話をした。

男の兒は初めは遊び相手のないのを淋しがつてゐたが、それにもいつか馴れて、良太の仕事をしてゐる傍で、何か獨言を言ひながら、終日長く遊んでゐた。おかねは女の兒を負つて、物を買ひに通りの方へ出て行つたが、綿の厚く入つた黄縞のねんねこが馬だの車だの通る街道に浮くやうに際立つて見えた。おかねは言つた。『東京ッて言つても、名ばかしね。小切を買ひに行くんだつて一里も行かなけりやないんだもの。田舎の町の方が餘程近い』

勤王家で學者の旦那の家は九段の方にあつたが、暇な時には、をり〳〵此方を見にやつて來た。

良太の働いてゐる傍に來て、

『おう、大分綺麗になつた』

こんなことを言つて、ぶら〳〵しながら、東京の方であつた話だの、役所の話だの、君公の話だのをした。良太が來て呉れたので殿樣が安心したと仰しやつたといふ話をしてきかせた時には、良太は冥加に餘つて勿體ないやうな氣がした。昔ならば、一生經つても、殿樣からお言葉を頂戴することなどは望んでも得られないことなのに、いかに四民平等の世になつたからと言ひながら、ぢかに良太と仰しやつた言葉を聞くのは、良太には此上もない名譽に感じられた。良太は駿河臺にある舊藩侯な宏壯な邸に二度ほど行つ

てゐた。

『私に引越せと殿様は仰しやつて下さるが、まだ二三年は駄目だね』

かう言つて、來ても旦那はぢき歸つて行つた。かと思ふと、おかねが縁側で汚れた小切などを散かして裁縫をしてゐる傍に、ひよつくり、庭の扉を明けて入つて來て聲をかけて驚かしたりした。旦那は良太とは三つ年上であつた。それに稚い時からおかねは邸に上つてゐたので『おかね、おかね』と言つて旦那はいつも親しい言葉をかけた。今でもおかねの姉のおつるは九段の邸に奉公してゐた。

竹藪を隔てゝ向ふに小さな尼寺があつた。その本堂の灯は、日が暮れると、大海の中の灯のやうに、闇の中に、ぽつつりと一つさびしく輝いて見えた。朝は早くから讀經の聲がきこえた。

さびしい寒い初めての冬が來た。野を通つて來る風は、凄じく周圍の樺や樫に鳴つた。朝ごとの霜は能を白くした。

『國よりも寒い位だ』

おかねはかう言つて、古い炬燵に火を入れた。東京の方に、何處か遠くで火事があると見えて、半鐘が一つ鳴つてそして止んで了ふやうな夜もあつた。

三

ある朝おかねは何氣なく三疊の戸を明けて見た。

『貴方、貴方ー』

急に聲を立てた。

丁度其時厠に入つてゐた良太は、けたゝましい聲を聞きつけて、何事かと思つて急いで其方へと走つて行つた。

『何だ、何だ』

驚いたやうな、氣味のわるいやうな顏をして立つてゐたおかねは、『大變、大變、捨さんが死んでゐる！』

『え！』

『捨さんが死んでますよ』

良太は急いで三疊へと入つて行つた。見ると、その佝僂は、汚ない破れた蒲團の上に身を半分乘り出して、何の苦痛もなかつたやうに、さながら眠つてゐるのではないかと思はれるやうに、顏を半分上に向けて死んで冷めたくなつてゐた。二三日前から、何だか體の具合がわるいとは言つてゐたが、昨日も夕方に一人でそとらぶら〳〵してゐた。藥でも上げませうかとおかねが言ふと、『あらば貰ふかな』と言つて、風邪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com